
仮面ライダーアース

賢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーアース

【Nコード】

N0238V

【作者名】

賢

【あらすじ】

普通の人とは違う両腕を持つ俺”海夜^{かいや}は誕生日にバスジャックに合い、戦闘用改造人間に改造されてしまう。洗脳される前に脱走した俺は死のうと崖から海へ身を投げた。しかし、俺は死ななかった。目の前に現れた2つの光る球体は”地球の意思”と名乗り、俺にこういった。「理不尽な死の運命から生命を護れ」と。地球の意思を受け継いだ俺は地球とリンクし、地球の力の一部を継承した。そして俺は生命の守護者を名乗った。

初作品でつたないですが、よろしければ読んでください

ブローグ

とある研究所

「ぐああああああ！！！」

研究所の中の一室

ベッドのような台の上に拘束された裸の少年が悲鳴を上げる

少年の体の上をメスが走る麻酔はしてあるが狂いそうな程の痛みが体中を襲う

そしてその隣の部屋で少年を見ながら機械を操作する研究員達

「あと少して体の改造が終了する。しかしあの少年は素晴らしい。他の実験台は麻酔をしても襲われる激痛に耐えられずに死んだというのに。」

少年に施されているのは体の改造である

戦闘能力を上げるために生まれ持った体を切り刻まれ、体中の骨を金属に換えられるあまりにも非人道的な行為である

研究員達が話をしていると機械に改造終了の文字が表示される

「骨の金属との入れ換えに耐えるとは・・・素晴らしい！やはり彼は普通の人間より強い精神力を持っている！まあ、18年間あの両腕で生きてきたのだから精神力も嫌でも強くなるか」

実験が終わった台の上に横たわる少年

少年には目に見えて普通ではないところがあった

研究員が言った通り両腕が肩まで赤黒く、その両肩の後ろから肩甲骨を通して繋がっている

更には爪も黒く、とても人間の腕には見えなかった

「だからこそ改造が成功したんだ。あの腕に感謝しないとな。後は洗脳を終わらせれば改造人間第1号の完成だ。」

18年間の苦悩の種である両腕が少年を人とは違う存在に変える手助けとなってしまう

ただでさえ人とは違う両腕を持って生まれ、両親も親戚もない天涯孤独の少年にどれだけの試練が待つのだろうか

俺は海夜^{かいや} 俺は普通の人とは違う

具体的にいえば両腕が赤黒く気持ち悪い

この腕のせいで俺には友達はいない

クラスメイトはおろか教師ですら俺には声をかけなかった

それでも俺は特に気にしなかった

孤児院にいたのだがそのときからずっと周りからの無視や虐め的なものにあつてきたからそれが普通だった

そして今日も学校からの帰りのバスの中、20人くらいの人が乗っ

ている

そのバスがジャックされた

俺は戦闘用改造人間に改造され、

そして俺は「普通の人とは違う」から「人間とは違う」になった

そして俺は「日常」から「非日常」へと歩みを進める

そして俺は異形の存在へと進化する

最後にひとつだけ思い出したことがある

今日は俺の誕生日（孤児院に捨てられていたので拾われた日）だった
18歳になった日だった

プロローグ（後書き）

初作品です

もしよろしければ読んでください

第一話 脱走

とある研究所

「さあ、あの少年の洗脳を始めようか。．．．これでようやく改造人間の完成だ」

先ほどとは違い、緑色のシャツと蒼いズボンを着た少年が横たわる部屋の隣の部屋で研究員がつぶやく。

これから行われるのは少年のこの研究を行っている組織へ服従するようにする洗脳である

だが

「．．．．．っん！．．．ここは！．．．俺は！」

拘束された少年が目を覚ます

すると隣の部屋の研究員が

「目が覚めたのかね。悪いがもう一度眠ってもらおうか」

研究員が少年は拘束されているので大丈夫だろうと思い、麻酔の入った注射器を片手に部屋に入ってくる

「来るな！」

少年はそう叫んで体に力を入れる
すると少年を拘束していた拘束具が壊れる

「なに!？」

「!・・・今だ!」

うろたえた研究員を押しつけて部屋から脱走する

「待て!!」

研究員が叫ぶが戦闘用に改造された彼の走る速さは尋常ではない

少年は脱出するために廊下を走りドアか窓を探す

研究所内に警報が流れ、研究員たちの足音が聞こえる

少年は近くにあった部屋へと入る

そこは

「げっ!トイレかよ!」

トイレだった

だが幸運なことにそこには外に通じる窓があった

幸いなことにその窓は人が通ることができるほどの大きさだった

「ラッキー!これで外に出られる!」

少年は窓を外すと同時にトイレに研究員たちが駆け込んできた

「待て!貴様にどれだけの金がかかっていると思っているんだ!」

「そんなもん俺が知るか!お前らが勝手にやったくせによ!」

そついうと少年は窓枠に手を置いて窓から身を乗り出す

「脱出成功だ」

少年は研究所から脱出した
研究所の周りは森になっていた

「とりあえず逃げるか」

少年は駆け出した
行くあても考えずただまっすぐに

しばらく走ると崖になり、下には海が見える
そして少年は何かを思い出したように顔を暗くし、絞り出すように
声を出した

「俺はこれからどうすればいいんだ・・・」

少年の問いに答えるものはない

孤児院に捨てられたため家族はない

孤児院では厄介者扱いされていたので戻れない

学校には行っていたが友達などいない

自分には帰る場所がない

頼れるものもない

現実を思い出した

「俺は・・・どうしたら・・・」

研究員たちに最後まで改造されたほうがましだっただろうか？

そうすれば以前のことを覚えていたとしても組織のために何かをして、それが組織のためになると思い幸せに生きていただろう人を殺す戦闘用改造人間として

そして今の自分がこんな風になっている原因を思い出す
自分の両腕である

「この腕が・・・なければ・・・！」

拳を握り崖の露出した地面に叩きつける

赤黒い腕の拳が血を噴出してその血を纏いさらに赤黒くなる

雨が降り出した

少年の心を知り、それを嘆くように

何度か地面を殴った後、少年は音も無く立ち上がる

そして崖の海のほうへと歩みを進める

「俺なんか・・・死んでしまえばいい・・・」

少年がそうつぶやくと少年の背後から研究員たちがトラックに乗りやってくる

「ようやく追いついたぞ！さっさとこっちへ戻れ！」

研究員がそう叫ぶが少年は構わず崖から落ちる寸前のところまで来る

「ちっ！こうなればもう構わん！研究成果はお前だけではない！キメラがあれば組織が世界征服をする戦力としては十分だ！あれを殺せ！」

するとトラックから何かが出てくる

人間のようなシルエットをしているが体のラインが歪だ
歩いてこちらに向かってくる
それを見て少年は愕然とした

「化け物・・・」

思わずそうつぶやいてしまうほどに向かってくるものは異形だ
頭部は犬のようであるが昆虫のような赤い複眼とその上に触覚があり、腕には鉤爪と肩には左右に一本ずつ触覚のようなものもあり、背中からは昆虫の羽根のようなものが生えていた
体は黒く昆虫の腹部のような形になっており、腰から下はこげ茶色の昆虫の足のようにになっていた

「っ！」

少年は化け物に殺されるよりも自分から死んだほうがましだと思ったのか、崖から身を放り出した
重力に逆らわず、確実にがけ下の海へと向かって落ちていく
落ちていく途中で少年は意識を失った

第一話 脱走（後書き）

第一話です

変身までもう少しかかるかもしれません

変身したら主人公設定の紹介を行いたいと思います。

それではまた次回

第2話 地球の意思

謎の場所

「・・・ん？・・・ここは・・・？」

崖から身を投げた少年は何も無い真っ白な空間にたたずんでいた
見渡す限り真っ白な空間だが振り返ると何も見えない真っ黒な空間
が少年を境に広がっていた

「ここは・・・一体？・・・」

少年がそうつぶやくと正面の真っ白な空間と背後の真っ黒な空間から
ひとつずつ、光がこちらへ向かってきて、少年の隣のそれぞれの
空間の境目で動きを止めた
白い空間からは緑色の光、黒い空間からは青色の光が来たのだった
不思議と恐怖感はない

「・・・少年よ」

緑色の光が少年に話しかける
威厳のありそうな深い男性の声だった

「われらは地球の意思。人とは異なる腕を持つ少年よ、お前はなぜ
今になって命を絶とうとするのだ」

「命を絶つことはもつと以前からできたはずです。確かに異形の怪物に襲われそうになったから逃げるために命をたつことにしたのか

も知れませんが、その腕です。人に嫌われる腕を持ったお前ならもつと以前に命を自ら絶つていても良いはずです。なぜ襲われるまで命を自ら絶たなかったのですか」

青色の光も少年に問いかける

自愛に満ちたようなやさしい女性の声だった

「・・・意気地なしで弱虫だったからさ。死つていうのがどんなものか見たことは無いけど、恐ろしいものだっていうのは感覚的にわかる。それが怖かったから俺は死のうとしなかったんだ」

少年は答える

死というもののへの恐怖

それゆえに自ら死に逝くようなことはしなかった

いや、できなかったのだ

「そうか」

緑色の光が納得したように声を上げた

「人とは違う腕を持って生まれたばかりに不憫な人生を送ってきたのですね」

青色の光が慰めるように声をかける

「少年・・・いや、海夜よ。死を恐れるなら、その死の運命と戦ってはくれないだろうか？」

緑色の光が少年”海夜”に問いかける

「本来、死とは寿命を全うした生命のみに訪れるものでした。しかし遙かな昔に死が見境無く命を受け入れるようになってから、生命は常に死と隣り合わせになってしまいました。生命がほかの生命を喰らう。それはもう変えることができない定めになっています。例えば狩りと称した命を奪うスポーツや生きるため意外の目的でほかの生命を奪う行動などです」

「人が人を殺す殺人もそれにあたる。生命が生まれたときはこのような事は無かったのだが・・・頼む海夜よ、あの異形たちによってまだ死に逝く運命ではない生命も命を落としてしまうのだ。頼めるのはお前しかないのだ」

青色の光が嘆くように戦いを問いかける理由を語る

緑色の光も補足し、再度海夜に戦ってくれるように問いかける

「俺に・・・どうやって戦えと？いくら戦闘用改造人間といってもあんな化け物には勝てないだろ？」

このとき海夜は知らないが戦闘用改造人間は戦闘のほかにもキメラと呼ばれるあの異形たちの司令塔になるために作られたのだった

そして海夜の問いに緑色の光がこう答える

「それなら問題は無い。キメラと呼ばれるあの異形たちに対抗できる力をキミに授けよう」

「あのキメラたちをあのままにしておいたら本当に大変なことになってしまうの。お願いです。死に逝く運命ではない生命を護るために戦ってください」

「………わかりました。戦います。そんな話を聞いた後にそのまま死んだら、地獄で化け物に殺されたやつ之魂に何されるかわからないからな」

言い訳じみて答える海夜だがその目には強い光が宿っていた

「ありがとう、海夜君」

青色の光が海夜に感謝の言葉を告げる
そして緑色の光も

「ありがとう、海夜。……これからキミにキメラを倒せる力とそのサポートをするものを授ける。」

海夜、左手を出せ」

海夜が言われたとおりに左手を緑色の光に向ける
すると左手の手首の辺りに青と緑を基調に作られたデジタル表示で丸型の腕時計が付けられた

「これは？」

海夜の問いに緑色の光が答える

「そいつはキメラを倒すための力を解放するためのアイテムだ。さらに皮肉にもお前は戦闘用改造人間に改造されているため、我らを与える力に加えてその改造人間の身体能力もプラスされる」

緑色の光が腕時計の力について解説を行う
そして青色の光も

「私からはあなたをサポートするものを与えましょう。もう一度左手を出してください」

海夜はもう一度左手を出す

すると腕時計が光った

光が収まると

「おはようございます。あなたが私のマスターですか？」

「うお！時計がしゃべった」

「これでその時計はあなたのサポートをしてくれるわ。あなたの世界で言うAIのようなものを組み込んだの。でもまだ名前もないし、あなたがマスターだという登録もしてないから今から行ってください」

青色の光が時計の新たな機能の説明を行う

「もう一度お尋ねします。あなたが私のマスターですか？」

「ああ、俺は海夜。苗字は無いから海夜って読んでくれればいいよ」

「わかりました。マスター海夜。よろしければ私にも名称を与えてはいただけないでしょうか？」

「長いからマスターか海夜のどちらかにしてくれないかな？名称か・
・」

「わかりました。ではマスターと呼ばせていただきます。それから

名称ですがあまりこだわらなくても結構ですよ」

このとき海夜は孤児院の図書室で読んだ本のことを思い出していた。「…………決めた。お前は”アーク”だ。運命は流れゆくもの。そして流れるのは水だ。俺が死という運命の川から生命を引き揚げるなら船がほしい。だからお前は生命を運ぶ箱舟”アーク”だ」

「名称登録”アーク”完了。ありがとうございます。これより私の名前はアークです」

アークの名称登録が済むと再び2つの緑色と青色の光に向き合う

「終わったようだな。戦いの方法ははすでにアークに登録してある。これでお前もキメラたちと戦うことができる。頼むぞ海夜。この星の生命を理不尽なしの運命から救ってくれ」

「戦いを引き受けてくれて本当にありがとう。厳しい戦いになるかもしれないけど、がんばってください。私たちはいつでもあなたの味方です。海夜」

緑色と青色の光が海夜に感謝と応援の言葉を送る

そして海夜の体が光に包まれ、海夜はたまらず目を閉じる

『がんばれ、海夜』

2つの地球の意思の言葉が心に響く

海夜が再び目を開けるとまた何も無い真っ白な空間が広がっていた

「マスター、お二人にいただいた力の使い方を説明いたします」

「ああ、頼むぞアーク」

「はい、マスター。ではまずバトルジャケットの構築を行います。マスターが戦いやすいと考える服装を想像しながら、セット・オンと唱えてください」

「わかった。……よし、バトルジャケット……セット・オン！」

海夜がそう叫ぶと海夜が光に包まれ光が消えたときには黒いロングコートを羽織り、黒いシャツ、黒い皮ズボンで、手にはオープンフインガーグローブを付けていた

「おおっ、すげえ！服が変わった。俺がイメージしたとおりだよ。アーク、お前すごいな」

海夜は感心して左手のアークを見るが形が変わっていた

「ありがとうございます。現在のマスターの状態ではカメラを倒すまでは行かずとも、十分に戦闘を行うことができます。そして現在の私の状態について説明いたします。その前にマスター、ジャケットの左側の内ポケットにカートリッジのようなものはありませんか？」

海夜はアークに言われたとおりにジャケットの左側の内ポケットの中を探ると、1枚のカートリッジがメモリーチップのようなものがあつた。

「これは？何だアーク？」

「それはマスターがキメラと戦う姿になるために必要なカートリッジです。それを私の下部にあるスロットに入れると、マスターは地球の意思を受け継いだ存在、”アース”へと変身するのです」

「地球の遺志を受け継いだ存在・・・アース」

「ちなみにアースの状態でなければキメラを倒すことができません。それではマスター、変身してください。変身後、マスターが身を投げた崖の上に転送いたしますので戦闘の準備をお願いします」

アークの説明を受けカートリッジを見る海夜

そして息を吐き、何かを決意したように顔を上げる

カートリッジを右手の親指と人差し指の間に挟んで顔の右斜め前にもって行き、アークを装着している左手を体の前に伸ばす

そして右手をアークのスロットに向けて動かし、左手を右手の力トリッジがアークのスロットに入るように動かしてカートリッジをアークのスロットに差し込む

そして右手は先に左手があった左前方へ伸ばし、左手は右胸の前に持っていく、叫ぶ

「変身！！」

叫んだ後にアークが光ってその光が海夜の体を包み込む

海夜が光の中で両手を広げると体中が濃紺色のボディになり、頭部は複眼でその複眼は側頭部の上ぐらいまで伸びている

胸には緑色の大陸を模したプロテクターがついており、両腕は方に黒いアーマー、腕部には胸と同じように大陸を模したガントレット、そして腹部には白地に地球の絵が書かれたバツクルのベルトがついていた

ここに理不尽なしの運命から生命を護る守護者 仮面ライダーアースが誕生した

第2話 地球の意思（後書き）

ようやくアースの登場です
次に設定 その次にバトルに入ります
それではまた次回

設定（前書き）

主人公とアース、アークの設定です

設定

主人公

海夜《かいや》

この作品の主人公

名前の由来は海の日（夜の夜）に拾われたから

上記の通り海の日（7月20日だった）に拾われたためその日が誕生日としている

生まれつきの赤黒い両腕（D・Gray-manのアレン・ウォーカーの左腕が両腕になった感じ）が原因で両親に捨てられたと思われる

学校には通っていたが友達（腕のせいで誰もいない）

小学生のころは夏でも長袖や手袋を着用していたが、中学生になったときにどうせ体育の授業で周りに見られるのだからと隠すのをやめた

18歳の誕生日にとある世界征服を目指す組織に乗っていたバスをバスジャックされ、その後バスに乗っていた人の中でもっとも早く改造されるが、持ち前の精神力で改造時の激痛に耐えてしまい戦闘用改造人間第一号にされてしまう（それ以前にも改造人間を製作していたが改造時の激痛に耐え切れず全員死亡している）

組織の研究所から脱出後、組織に追われ異形の怪物”キメラ”に殺害される前に自ら崖から飛び降りて自殺を図る

しかし彼は死なず、地球の意思と名乗る緑色と青色の2色の光りと接触し、怪物に殺される理不尽なしの運命から生命を護ってほしいと頼まれ、これの頼みを受け、地球の意思を継いだ生命の守護者”

仮面ライダーアース”へ変身する

アース以外にも地球の意思から地球上でおきていることや情報を調べることができる”ファイル・オブ・アース”という能力ももらっている（仮面ライダーWのフィリップが使う”星の本棚”と同じ能力。欠点もほぼ同じ）

バトルジャケツト

機能的には魔法少女リリカルなのはのバリアジャケットとほぼ同じだが魔力は使用していない

海夜のバトルジャケットは黒いロングコートを羽織り、黒いシャツ、黒い皮ズボンで、手にはオープンフィンガーグローブ（全体的には仮面ライダー555の仮面ライダーオーガみたいな感じ）

この状態ならばキメラを倒せずとも、時間稼ぎぐらいのことはできる改造人間になった海夜はこのジャケットの影響もあり、常人の10倍近くの力・速さ・耐久力を得る

なお、アースに変身するときはこのバトルジャケットを下地にするのでこれを展開しないとアースになれない欠点がある

仮面ライダーアース アースフォーム

アースの基本形態

体中が濃紺色のボディで、頭部は緑色の複眼でその複眼は側頭部の上ぐらいまで伸びている（仮面ライダーNEW電王ストライクフォームのような感じ）

胸には緑色の大陸を模したプロテクター（アーステクター）がついており、両腕は方に黒いアーマー、腕部には胸と同じように大陸を模したガントレット、そして腹部には白地に地球の絵が書かれたバトルベルトがついていた

緑色と青色を基調とした仮面ライダー

地球の意思を受け継いだ海夜が変身ツールのアークを使って変身する姿

基本は素手で戦う

身長：194 cm

体重：97 kg

パンチ力：5 t

キック力：12 t

ジャンプ力：30 m

走力：100 mを6秒

状況に合わせてほかのフォームに変身して戦うことができる
(アースの別フォームは登場し次第あとがきに設定を書いていきます)

アーク

地球の意思が海夜のサポート用に渡した変身ツール

ほぼりりカルなのはのデバイスと同じ解釈で構いません

普段は青と緑を基調に作られたデジタル表示で丸型の腕時計として海夜の左腕に装着されている

耐水耐熱帯電はもちろんキメラに攻撃されても傷ひとつつかない優れもの

海夜がバトルジャケットを装着すると形状が変化し（未来戦隊タイムレンジャーのブイコマンダーのような形）、下部には変身するためにカートリッジを入れるスロットがある

名前の由来は海夜曰く「運命は流れゆくもの。そして流れるのは水。俺が死という運命の川から生命を守護するために引き揚げるなら船がほしい。だからお前は生命を運ぶ箱舟《アーク》だ」とのこと

カートリッジ

海夜がアースへ変身するために使用するカートリッジ

見た目はSDカード

アースに変身するカートリッジには地球の絵が描いてある

設定（後書き）

設定です

この次にバトルですが、自信がまったくありません
がんばって書くのでよろしくお願いします

第3話 救済

海夜がアースに変身する

「すげえ！これが地球の意思が言っていた力なのか」

「イエス・マスター。この形態はアースといいます。ちなみにアースのこの形態には固定武装などありませんので基本的に素手での戦いとなりますが、感覚などの強化があるため、あまり苦戦などはないでしょう。」

アークに簡単なアースの説明をしてもらう

「わかった。とりあえず戦いに行こう。まずはあの犬顔昆虫のキメラからだ！」

「マスター、あのキメラたちは組織のせいである生物同士が融合して作られた存在です。」

彼らキメラを倒すということは融合させられた生物の命を奪うことになります。

そこでキメラの融合を解除させ、元となった生物に戻すプロセスが組み込まれています」

命を護れといわれた彼が命を奪うなどもつてのほかである

特にキメラは組織によって融合させられたいわば被害者である彼らを助ける事がアースにはできる

「わかった。どうやればいいんだ？」

「まずベルトの両腰部分を同時に叩きます。そしてそこから発せられるエネルギーを体のどこへ誘導するのかをイメージしてください。そうするとイメージした場所にエネルギーが溜まり、それをキメラに打ち込むとキメラを分解し、元となった生物へと戻すことができます」

「了解！よし、さっさとあの犬顔昆虫を助けないな」

やる気を出して戦いへ望もうとするアース

「わかりました。では地球の意思の言うとおりに、マスターが飛び降りたか崖へと転移します。ちなみにマスターが飛び降りてからあの場所では10秒とたっておりませんので」

「わかったよ。それから聞いとくがキメラってどれくらいいるんだ？」

「現段階ではまだ20体です。しかしこれから増えることが予想されるので増える前に組織を壊滅させるほうが望ましいと思われます」

現段階では20体のキメラ

しかし量産体制ができればおそらく一人では立ち向かえないだろう
そうなる前に組織を壊滅させる
それがアースの目標となった。

「よし、行くか！初バトルだ。」

「了解しました。ちなみに最初からキメラの融合は解除はできませんので、ある程度弱らせてからのほうがよろしいかと思います」

「なるほど。じゃあ融合解除ができるようになったときに言ってくれ。そうしたらさっきのやつをやるからさ」

「了解しました。それでは10秒後に転移します。準備はよろしいですか？」

いよいよ最初の戦いが始まる
アースとしての戦いが

「かまわない。転移してくれ」

「了解。転移します」

こうしてなぞの空間から転移したアースは、海夜が飛び降りた崖へと転移した。

海夜が飛び降りた場所

海夜が飛び降りたところに突如光が差した

「なっ！なんだこれは！」

研究員たちがうろたえる中、アースが転移してきた

「転移完了です。マスター」

「そうみたいだな。さて、さつさと終わらせるか。早く助けてやらないとな」

そうしてアースはファイティングポーズを犬顔のキメラに向ける

「何だあれは！突然現れたぞ！面白い！キメラよ、あれを生け捕りにしろ！」

研究員の命令によってキメラがこちらに向かってくる
犬を素材として使っているらしくなかなか速いが

「てりゃ！」

アースは向かってきたキメラに対してカウンターの要領で顔面を殴り、キメラを殴り飛ばす

「・・・すげえ。パワーがぜんぜん違うし、あいつの動きが良く見える。それに体が軽い！」

「身体能力の強化がありますから当然です」

アースの力に驚く海夜

だが驚いているのは海夜だけではなかった

「キメラを一撃で殴り飛ばすだと！何なんだあれは！」

研究員が驚愕の色を浮かべる

そして海夜はそれを聞き、こう名乗る

「俺はアース。生命の守護者 アースだ！世界征服などこの俺がさ

せない！」

名乗りを上げるアース

そしてアースは殴り飛ばされたキメラに向かって走り出し、パンチとキックでキメラにダメージを与える

キメラに反撃の隙を与えずに何度も攻撃し、ダメージを蓄積させる
そして何撃か目の蹴りでキメラとの距離を開ける

「マスター、キメラにだいぶダメージが溜まってきました。今ならば融合を解除させることが可能です。先ほど説明したとおりにお願いします」

「わかった！今助けてやるからな！」

そしてアースは教えられたとおり、両手でベルトの両側を同時に叩く
するとベルトの右側から緑色の光が、左側からは青色の光が発生する

「（この光を・・・よし、足に！）」

アースがそう念じると光はそれぞれ発生した側の足に纏われる

そしてアースはすでに立つのが精一杯なキメラに向かって駆け出す
キメラの5メートルくらい前で飛び上がり前方宙返りから両足蹴りを繰り出す

「てりゃあああああっ！」

アースの蹴りがキメラにヒットする

蹴りが当たった反動を利用して後方宙返りを行い体をひねり、キメラに背を向けて着地する

「●●●●●●●●！」

人ではなく素体となった生物の鳴き声でもない悲鳴のようなものを発するキメラ

そしてキメラの体がアースの放った蹴りの緑と青が合わさった青緑色光に包まれたと思うと光が二つに分かれ、素体となった動物である犬と昆虫（今回はバツタ）であった

バツタのほうはすぐにどこかへ跳ねて行ってしまったが犬のほうはだいぶ衰弱していた

「まさか！キメラの融合を解除させたのか！そんなやつがいたとは！早くこのことを報告しなければ！」

「させると思ってるのか？」

「！？」

様子を伺っていた研究員たち全員を気絶させるとトラックの荷台へ押し込み自分は衰弱した犬を連れて運転席へ行く

幸いにもトラックは自動運転で目的地を入力すれば自動でそこへ向かうというものであった

アースは海夜へと変身を解除するアークが声をかけてきた

「お疲れ様です、マスター。初戦闘にもかかわらず素晴らしい戦いでした」

「ありがとよ、アーク。とりあえずこいつらをさっきの研究所に持って行って警察にでも連絡するか。

でも、なんて言えばいいんだ？」

「とりあえず非人道的な研究をしている施設を発見したと言って我々はそこから逃げましょう。マスターが連絡をしている間に私は組織についての情報を収集します」

役割分担を決めてバスを施設を向けて発進させる

海夜のアースとしての戦いはまだ始まったばかりである

第3話 救済（後書き）

初戦闘（短い！）でした

自分の技量ではこれが限界でした

戦闘もこれからうまく書けるようになればと思います
それではまた次回

第4話 情報

キメラとの戦闘を終えたアース

海夜は自分が改造された研究所へ戻り、アークは施設のコンピューターをハッキングして情報を集める

なお、この施設には電話が無いことがわかったのでアークに頼み、警察への連絡を頼んだ

ちなみに警察のコンピューターをハッキングしてその発信地をこの場所で行っていると逆探知させてここを知らせるという手段である

「・・・なんだか俺たちが悪いことをしている気がするが・・・」

「何をしているんですかマスター。情報の収集は終了したので早くここから離れましょう。早くしなければ警察が来てしまいます」

「・・・やっぱ俺たちが悪役のような気がしてきた・・・」

ほかに手が無かったとはいえ警察のコンピューターをハッキングして場所を知らせるといふ、良いのかわからない手段でこの施設の場所を知らせた海夜たちは、先ほど同様自動運転のトラックを使って施設から離れる

ちなみにトラックはアークがハッキングして動かしている

ちなみに荷台に乗せていた研究員たちは全員拘束し、手近な部屋に放り込んでおいた

ちなみにそのときに見つけた医療セットなどを持ち出して、犬の手当てに使えないだろうかと考えている

「マスター、今のうちにマスターが授かった能力についての説明を行っておきます」

「ん？アース以外にも何かあるのか？」

「はい。マスターは私を通して地球上にあるもの全ての情報を知る”ジ・アース・オブ・ファイル”という能力を授かっています。欠点としては自分が知っている情報とその延長線上にあるものしか検索できず、キーワードを使って検索するのですが、キーワードが足りないとは検索できない、情報を知ることができないというものです」

「・・・とりあえずそれを使えば、カメラがどこにいるのかとかがわかるのか？」

「そのカメラについてある程度の情報があればですが。とりあえずは先ほど見つけた医療セットで犬の手当てができないかを検索してみましよう。使い方ですが、まずわたしの中に意識を移すようにイメージしてください」

「・・・こうか？」

海夜は目を瞑り自分の左腕に装着されているアークに意識を飛ばすようにイメージをする

すると海夜の意識は薄くなり、海夜が目を開けるとパソコンに表示されているウィンドウのようなものが浮いている真っ白な空間が広がっていた

海夜の近くにはペンとノートが浮いていた

「・・・ここは？」

「ここはジ・アース・オブ・ファイルで情報を検索する場所で”海”と呼ばれています。ここでは検索したいことのキーワードをその

ペンでノートに書き込むことで検索を行います。まずは”犬の治療法・手持ちの医療セット”で検索してみてください」

アークの指示道理にペンでノートにキーワードを書き込むと、浮いていたウィンドウが一瞬砂嵐になって先ほどとは別の情報を映し出すそれは今衰弱している犬の手持ちでの医療セットを使った治療法であつた

そしてそれらの情報を元に犬の治療を行うために”海”から出る

「とりあえずこれでいいのか・・・？」

「はい。しかしこれは現状維持にしかありませんのでやはり病院へ連れて行ったほうがいいでしょう」

先ほどの情報通りに治療を行ったが回復の兆しが見えない
アークの言うとおり動物病院へ連れて行ったほうがいいだろう
そこからしばらく走っているとまだ森の中だというのに人影が見えた

「なんだ？人か？」

「マスター！前方からキメラの反応です。研究所との通信が途切れたので偵察に来たのかも知れません」

アークがトラックを止め海夜が降りると、キメラが近づいてきた
今回のキメラは猫科の動物の顔に、体の前側は毛皮、背中側はトカゲのような爬虫類系の動物の鱗
両手足には長い爪が伸びており、鱗で覆われた尻尾もあつた（猫蜥蜴キメラ）

「こいつもまた奇妙だな。・・・早く元に戻してやらないとな！ア

ーク！バトルジャケット、セット・オン！」

「YES！Master！」

海夜がバトルジャケットをまとう

すると猫蜥蜴キメラのほうから声が聞こえてきた

「貴様！改造人間第1号！貴様がそのトラックにいるということはあの研究所から逃げ出したのか！」

男の声が聞こえてきたが猫蜥蜴キメラがしゃべったわけでもないようだ
通信機がキメラに取り付けられているのかもしれない

「ああ、そうだ！世界征服なんか俺がさせないからな！ーク、変身だ！」

「YES！Master！」

海夜が左の懷からカートリッジを取り出して前のように構えてカートリッジをークのスロットに差し込んで叫ぶ

「変身！」

両手を広げると海夜はアースへと変身する

そして変身が完了すると同時に猫蜥蜴キメラへ向かって駆け出す
キメラもアースへ向かって駆け出して先頭が開始される

「でりゃ！はあ！」

アースは拳や蹴りで攻撃するも猫蜥蜴キメラは猫のようなすばやさ

で攻撃を回避し、両手足の爪でアースを攻撃しては離れるという一撃離脱の戦法を取っていた

「くそっ！速すぎだ！攻撃が当たんなきゃ元に戻せねえ！」

「それならばマスター、ベルトの右側を押してください」

「え？右側？・・・こうか？」

アースがベルトの右側を叩いて押す

するとベルトの右側から緑色の光が発生し、その光からカートリッジが現れてアースの右手に収まる

「これは？」

「それを変身と同じように私のスロットにセットしてください」

アースは変身の時のように構え、アークのスロットにカートリッジを挿入して叫ぶ

「変身！」

すると複眼が白くなり大陸を模したアーステクターは右斜め上から木漏れ日が挿したような光景を模したエンプレムの描かれた円盤型のプロテクターに変わった

体全体も白に黒と緑のラインが入ったものになる

「色が変わった！なんだこれ！」

「マスター、これがアース　ヘブンフォームです」

「へブンフォーム・・・これが・・・」

アースが自身の変化に驚いていると

「二ギヤヤヤヤー!」

「うおっ!」

猫蜥蜴キメラが先程と同じ戦法で攻撃してきた

「アーク!このフォームだと何が出来るんだ!?!」

「マスターもう一度ベルトの右側を叩いて、その後は精神を集中してください」

アースは言われたとおりにもう一度ベルトの右側を叩く
すると右手に銃口が三つもあるリボルバーのような銃が現れた
それを握り、猫蜥蜴キメラを見るが先程よりも猫蜥蜴キメラの動き
が良く見えるそれを感じたのか

「このへブンフォームはアースフォームよりも感覚が鋭くなっています。マスター、その銃”へブンブラスター”で反撃です!ですが一度撃つたらそれだけにしてください」

「了解!」

へブンブラスターを猫蜥蜴キメラに向けて撃つ

三つの銃口から一斉に緑・白・黒の光を纏った弾丸が放たれる
それらは猫蜥蜴キメラに吸い込まれるように命中する

一つ一つになかなかの威力があるようでキメラの動きもその一撃だ

けでもずいぶん遅くなった

「おいアーク！結構威力があるけど大丈夫なのか？猫とたぶん蜥蜴は？」

「はつきり言つてこれ以上ヘブンブラスターで攻撃を加えるのは危険です。やはり威力が高すぎます。このまま攻撃を加えたら素体になった生命が死んでしまいます。アースフォームに戻ってけりをつけてください。このフォームではキメラの融合解除は行えませんので」

「えっ！このフォームだとできないの！でどうやって戻るの？」

「融合解除を行うときのようにはベルトの両サイドを同時に叩いてください」

アークの言うとおりにベルトの両側を叩くとアースは光に包まれてアースフォームへと戻る

「よし！これで決める！」

アースは再度ベルトの両側を叩き緑色と青色の光を発生させるそれを両足へと集めキメラへ向かって駆け出す
ヘブンブラスターをくらったダメージがまだ残っているのか動きが先ほどと比べて遅い

しかしそれがチャンスだといわんばかりにアースはキメラの5メートルくらい前で飛び上がり、前方宙返りから両足蹴りを繰り出す

「てりゃあああああっ！」

前回同様、蹴りが当たった反動を利用して後方宙返りを行い体をひねり、キメラに背を向けて着地する

「●●●●●●●●！」

キメラが悲鳴を上げて緑と青の光に包まれ、素体へと融合解除された今回素体となっていたのは予想通り猫と蜥蜴

蜥蜴は前回のばった同様、すぐにどこかへ去って行ってしまったが猫は前回の犬同様衰弱していた
近くには破損した通信機のような機械が転がっていた

「もしかして体のでかいほうがダメージを反映して受けるのか？」

「おそらくそうでしょう。ヘブンブラスターの調整を行っておきますので次回の戦闘からはもっと回数を撃つても大丈夫だと思います」

「いやそんなに撃つても大丈夫って言われてもな」

衰弱した猫を先ほど犬を治療したときのようにジ・アース・オブ・ファイルで検索しそれを実行してから猫を連れてその場を離れ、人里を目指してまたトラックを進める

「マスター、あと3時間で人里に着く予定です。病院の後、その後はどういたしましょう。」

「とりあえず組織のアジトを見つけよう。アーク、場所はわかんる？俺は帰る場所なんて無いから・・・でもまあ、世話になったんだから院長に挨拶ぐらいはしてくか」

まずは人里へ行き動物病院へ犬と猫を預ける
その後は世話になった孤児院の院長に礼を言いに行きアークが研究
所で入手した組織のアジトを破壊し、世界征服の野望を潰す
このときの俺はまだ覚悟が足りなかった
キメラとの戦いに対する覚悟が

第4話 情報（後書き）

これからは2週間置きに投稿するようにしようと思います
この先は毎回戦闘を行っていくようにしたいと思っています

仮面ライダーアース ヘブンフォームの紹介です

仮面ライダーアース ヘブンフォーム 以後ヘブンアース

アースフォームのベルトの右側と叩いてカートリッジを召喚し、それをアークのスロットにセットして変身する

アースフォームよりの感覚が鋭くなる反面攻撃力や防御力が下がる
ベルトの右側をもう一度叩くと専用武装”ヘブンブラスター”を召喚できる

ヘブンブラスター

銃口が三つもあるリボルバー型の銃

上から白、右から緑、左から黒の銃弾が発射され、それぞれをアースの意思でどれを撃つか決める

銃弾の色によって追加効果が違う

白は目視できないほどの速さで飛び

緑は当たると電撃が走り相手は動けなくなる

黒は重力を纏い当たったときの威力が増す

ちなみに三つ同時に放つと追加効果は消える

第5話 意識（前書き）

検定や資格試験などの連続で投稿できませんでした
ごめんなさい

第5話 意識

「それじゃあ、こいつらをお願いします」

猫蜥蜴キメラを倒して猫と蜥蜴に分けた後、人里にたどり着いて動物病院にキメラの素材にされていた犬と猫を預けた

これから俺が育った孤児院の院長に世話になった挨拶をしにここへとしていくところだ

正直あまりいい思い出も記憶も無いがここまで育ててもらったのに
は変わりない

そういえば今は残暑の厳しい9月の半ばで俺は約2ヶ月の間あの研究所にいたことになる

ちなみに俺が施設を脱出してから1晩たった

正直、院長達にどんな顔していけばいいのかわからない

恐らくは厄介者である俺がいなくなってホッとしているかもしれない
とりあえず孤児院にある俺の服だけでも取りに行きたいな

処分されてなければいいけど・・・

ちなみにその孤児院は海沿いの海岸にある

約3時間、トラックに乗り孤児院のある町にたどり着く

この町もあんまり大きくは無く、しばらく前から潮のにおいがしている

時刻は午後5時で夏だからまだかなり明るい

ようやく孤児院にたどり着いて玄関を目指すが誰もいない

「おかしいな。この時間ならまだガキ共が遊んでるはずなのに・・・」

「

「・・・！マスター！孤児院内部から生体反応がありません！それ

からキメラの反応があります！おそらく我々を待ち伏せしていたのでしょう」

「何だつて！」

この孤児院出身の俺が逃げ出したことで組織の連中は、俺がこの場所に戻ってくると踏んだのかこの孤児院に先回りし、占拠したらしい

「アーク、生体反応なしって事は誰も生きてないのか・・・」

「・・・はい、ここからでの観測ではこの建物内に人間の生体反応は確認できません」

わずかな望みをかけてアークに生存者がいるかどうか聞いてみるが、連れ去られた以外に生存は期待できないだろう
いやな思いでしかない場所でも、なぜかそれを聴くと寂しくなる

「アーク、早とちりかもしれないがこの孤児院にいたやつらの弔いだ。キメラの数は？」

「反応は1つです。マスター、バトルジャケットの展開をしますか？」

「ああ、いくぜアーク！セツト・オン！そして、変身！」

海夜にバトルジャケットが展開され、さらにアースへ変身し、そのまま孤児院に乗り込む

すると壁には血痕があり、内部はめちゃくちゃに荒らされていた
そして孤児院の奥から叫び声が聞こえた

人間ではなく、キメラのものと思われる鳴き声が

「あつちか！」

「マスター！罨を張っている可能性があります！むやみに突っ込まず、慎重にいきましょう」

しかしアースはアークの言葉を見せず、孤児院の奥へと向かって走る。その心には自分の育ったところとそこに住んでいた人を殺したというキメラと組織に対する憎悪のみで動いていた。しかしそれがいけなかった。

「っ！！なんだこれは！！」

アースは孤児院の奥に走っていたはずが急に体が動かなくなった。よく見るとアースの体には細い糸のようなものが絡み付いていた。よく見ればそれは蜘蛛の巣のようだった。

「くそ！動けない！」

すると孤児院の奥のほうからこちらへ向かってくる影が見えた。おそらくはそれがこの罨を張ったキメラ。その見た目は蜘蛛と鼠を融合させたようであり、背中から蜘蛛の足のようなものが4本ずつ左右から生えている。しかし、問題はそれだけではない。

「マスター！キメラの反応はあいつだけではありません！私たちの後ろから2体と前方奥から1体、合計4対の反応があります！やはり罨です！」

アークからの報告は動けないアースにとって絶望的なものだった。

今までは1体ずつで戦っていたが今回はなんと4体ものキメラと戦わなくてはいけないのだ

「くそ、アーク！ヘブンで行くぞ！」

アースはそういつとベルトの右側のボタンを押して右手にカートリッジを召喚し、それをアークのスロットに入れる

「変身！」

アースはアースフォームからヘブンフォームへと変わり、もう一度ベルトの右側のボタンを押してヘブンブラスターを召喚する

ヘブンアースはヘブンブラスターで蜘蛛鼠キメラを緑色の弾丸で撃ち、その追加効果の電撃でしびれさせる
そのうちに蜘蛛鼠キメラの巣を撃ち、罨を脱するとその強化された感覚で捕らえた敵の動きを探る

「っ！そこだ！」

ヘブンアースは振り返ると三つの銃口から連続して白、黒、緑の弾丸を撃ち込む
するとキメラの悲鳴のようなものが2つ聞こえ、後ろの敵が大分近づいていることを察した

「……………」

そして痺れから回復した蜘蛛鼠キメラとその背後から現れる別のキメラ

そして威力を抑えられたヘブンブラスターの攻撃で少しよろめいて

いるキメラが背後から2体

そして全てのキメラには共通していることがあった

このキメラ達の共通点は「蜘蛛」

相手を束縛し、捕まえるにはうってつけのキメラの素材である

今回のキメラは最初に現れた鼠と蜘蛛を融合させた蜘蛛鼠キメラ

2体目は蜘蛛と兎を融合させたような蜘蛛兎キメラ

3体目は蜘蛛と犬を融合させたような蜘蛛犬キメラ

4体目は蜘蛛鼠キメラの後ろから現れたキメラだがこいつだけほかとは違い蜘蛛以外の特徴があまり見られない

「貴様が改造人間1号か」

「っ！キメラがしゃべった！」

4体目のキメラはなんと人間の言葉を話した

前回の猫蜥蜴キメラように通信機からの声ではない
太く落ち着いた男の声だ

「俺はキメラではない。貴様と同じ改造人間だ」

「なにっ！」

「貴様を改造したときのデータとキメラの生成法を応用し、どんな人間でもほかの生物と組み合わせで改造できるようになった。改造人間としてのスペックは貴様より劣るが、別の生物の能力を得たことで貴様に負けることは無い」

「アーク！あいつが言っているのは本当ならやばいんじゃないか？」

「確かにまずいです。マスターここは引きましょう！3体のキメラにマスターと同じような改造人間、さすがに分が悪いです！」

「悪いがアーク、あいつらは俺が世話になったここをめちゃくちやにしたんだ！ゆるさねえ！」

「マスター！」

アークがヘブンアースに撤退を促すがそれを聞かずにヘブンプラスターを蜘蛛の改造人間（以後蜘蛛男）に向けて乱射する

しかし蜘蛛男は背中から生えた蜘蛛の足で身を護り、ヘブンアースに近づき腹を殴る

防御が低く、乱戦向けではないヘブンアースは大分ダメージを受けてしまう

「これじゃ不利だ！」

ヘブンアースはそういうとベルトの左側のボタンを押してヘブンフォームからアースフォームへと戻る

しかし1体4の戦況を覆せず、アースは大ダメージをおい、さらにキメラが張った蜘蛛の巣の罠にまたかかってしまう

「くそっ！またか」

「改造人間一号、貴様は危険な存在だ。ここで死んでもらう」

蜘蛛男がそういうと蜘蛛のキメラがアースに攻撃をし始める

動けないためその攻撃を受けるしかないアースはどんどんボロボロになっていく

度重なる攻撃に蜘蛛の巣が耐えられずに壊れ、アースの拘束はなく

なるがすでにアースはボロボロだ
かろうじて立ち上がるアースの、海夜の目には自分に近づいてくる
キメラたちが映る

「俺は・・・死にたくない！」

「マスター！ベルトの左側を叩いてください！その後の流れはヘブ
ンと同じです！」

「うおおおお！」

アースは後ろへ下がり、指示通りベルトの左側のボタンを押す
するとベルトの右側から青色の光が発生し、その光からカートリッ
ジが現れてアースの右手に収まる
ヘブンと同じ要領といわれたので、アースはそれをアークのスロッ
トにセットして叫ぶ

「変身！」

すると複眼が黒くなり、アーステクターは下から業火が吹き上がる
ようなエンブレムの描かれた円盤型のプロテクターへ変わる
体全体も黒をベースに白と青のラインが入ったものになる

「はあ、はあ・・・アーク、このフォームは？」

「これはアース ヘルフォームです。マスター」

「ヘル・・・天国の次は地獄か」

アースの姿が別のものになり、蜘蛛男や雲をベースにしたキメラ

たちは

「ふん。姿が代わったからといって恐れることは無い。やつはすでにボロボロだ。行け！」

『・・・・・・・・ツ！！！』

蜘蛛男の掛け声によってキメラたちがアース ヘルフォーム（以後ヘルアース）へと殺到する

「アーク、このフォームの特徴は？」

「身体能力の最大強化です。攻撃も防御も3つのフォームの中で一番です。そしてマスター、ベルトの左側のボタンをもう一度押してください」

「この流れはまた武器か？」

アークに言われてもう一度ベルトの左側のボタンを押す。するとアースの右手に鎌が召喚される
その鎌は刃が漆黒でとても長く1メートルある
しかし、

「あれ？こんなにでかい鎌なのに重さを感じない・・・まあ、いいや！でえりゃあ！」

巨大な鎌なのにまったく重さを感じないことに驚きつつも、迫ってくるキメラたちに向けて鎌を一閃する
すると

『●●●●●●●●!!』

キメラたちを一撃で行動不能にした
しかし凄いのは刃で切られたのにどこも切れていないキメラたちで
あった

「あれ、切れてない」

「その鎌は私かマスターの意志で切れ味を変えることができます。
斬ろうと思えば地球で作られたもので切れないものはプレートなど
の地下にあるもの以外ありません。範囲に限界はありますが」

「そいつはまた・・・」

しかし、それに驚愕していたのはアースだけではなかった

「一撃だと！おのれ！改造人間一号！」

「俺は改造人間一号じゃねえ！」

ヘルアースはベルトの右側のボタンを押してアースフォームに戻り

「俺は海夜！そしてこの姿がアース！生命の守護者、アースだ！」

そう宣言してアースは蜘蛛男に肉薄する

先ほどまでボロボロにやられていたとは思えないほどの動きで蜘蛛
男へパンチやキックのラッシュでダメージを与えていく
そして

「はあああつ！」

「ぐおっ！」

アースの蹴りが蜘蛛男の腹に決まり、蜘蛛男は行動不能になったキメラたちの上に倒れる

「アーク、キメラの融合解除技のあの光って俺の意思でどうにでもできるのか？」

「はい。大体のことはマスターの意思で操作することができます」

「よっしゃ！なら！」

アースはベルトの両側を同時に叩いて両手にそれぞれ青と緑の光を纏わせる

「これを・・・こうすれば！」

そして剣を握るように手を合わせるとそこから青と緑が混ざったような色の光の剣ができる（幽々白書の桑原和真の霊剣みたいな感じ）

「よし！こいつで！」

そしてアースは何か立ち上がったキメラたちと蜘蛛男に向かって光の剣を横一閃する

「・・・・・・・・ツ！！！」

蜘蛛男を含めキメラたちが絶叫を上げる

そして彼らが光に包まれ、それが晴れるとそこには3匹の蜘蛛、犬、

兎、鼠、20代後半くらいの男性が横たわっていた

そしてアースも壁に寄りかかり、変身が解けて疲れから寝てしまう
次に目覚めたとき何が起こるのか想像もしないまま

第5話 意識（後書き）

遅くなってすいませんでした

ヘルフォームの紹介です

アースフォームのベルトの左側を叩いてカートリッジを召喚し、それをアークのスロットにセットして変身する

アースフォームより身体能力が極限まで上昇しており、攻撃と防御も3つのフォームで1番高い

もう一度ベルトの左側のボタンを押すと、刃渡り1メートルの巨大な鎌 ヘルデスサイズを召喚できる

漆黒の刃にヘルアースとアークの意思により切れ味を変えることができる

アーク曰く地球で切れないものはプレートなどの地下にあるものだけらしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0238v/>

仮面ライダーアース

2011年11月13日03時34分発行